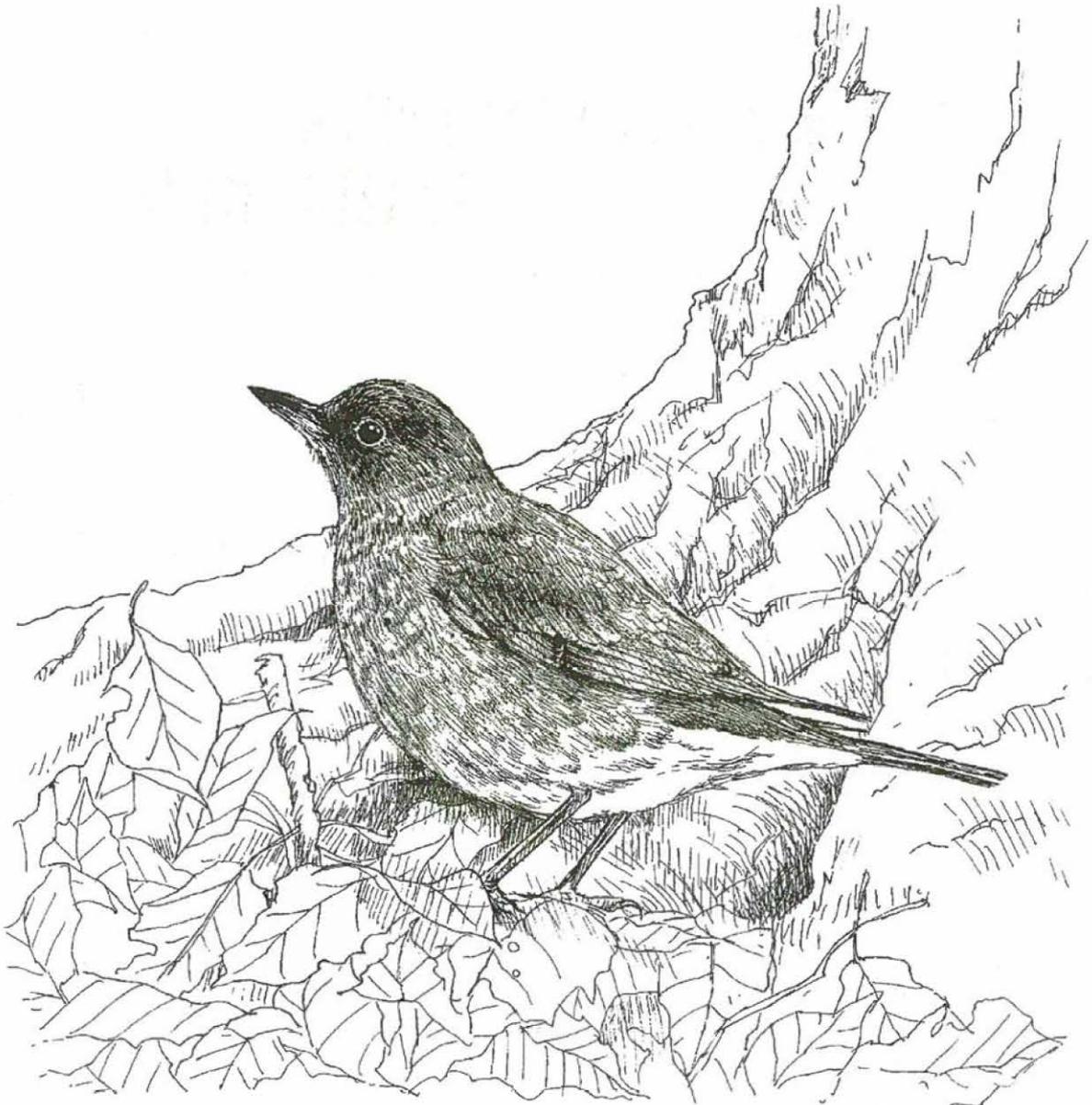


# 群馬の自然

特集「ぐんま百名山の自然区  
尾瀬の山々」

No.163  
2012 冬

特定非営利活動法人(NPO)  
群馬県自然保護連盟  
URL <http://www5.wind.ne.jp/shizen/>  
e-mail [shizen@dan.wind.ne.jp](mailto:shizen@dan.wind.ne.jp)



シロハラ

巻頭言

故きを温ねて新しきを知る

理事長 金井 賢一郎

新年あけましておめでとございます。

会員の皆様、ご支援いただく多くの団体や個人の皆様、ご健康で新しい年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

昨年は本連盟にとつては創立40周年を迎え、諸行事をつつがなく終了し、一つの年輪を印して参りました。

目を転じると、3・11の東日本大震災による被害は、言い表しようのないほどの拡がりになり、罹災者は日を追う毎に増えた事は皆様ご承知のとおりです。しかし、それらのことから「生きている事の喜び」が自覚され、人と人との和が生まれ、絆が叫ばれ、いま最も必要な叫び声になりました。そして世の中にしみ通っていった、と思われまます。こうした意識や行為の連続がすべからく「生きている喜び」の証として行動につながるものになるのでしょうか。昨年を現わす漢字は「絆」でした。

いま、3・11から学んだことはたくさんあ

ぐんま百名山の自然区  
尾瀬の山々

目次

表紙	シロハラ	水村 聡子	1
巻頭言		金井賢一郎	2
特集	ぐんま百名山の自然区		3
	尾瀬の山々		
尾瀬・景鶴山	関 敏雄	3	4
富士見峠から四伏山へ	亀井 健一	4	5
尾瀬至仏山から笠ヶ岳の思い出	浅川千佳夫	5	6
尾瀬笠ヶ岳	須藤志成幸	6	7
尾瀬笠ヶ岳二〇五八m	卯木 達朗	7	8
鬼怒沼山	齊藤 長作	8	9
尾瀬ヶ原の魚	片山 満秋	9	13
魚沼から行く尾瀬	今井 隆夫	13	15
行事報告			
木曾駒ヶ岳 (8月6〜7日実施)	高野 賢一	15	16
西御荷鉾山 (10月2日実施)	板橋 良寛		16
上州三峰山 (10月30日実施)	米田 玲子		17
植物歳時記 (56) マツ	吉田 龍司	17	20
凶鑑の内と外 植物私記③ノハナシヨウブ	佐鳥 英雄	20	22
群馬の地質 湯檜曾川の地質	飯島 静男	22	23
残された自然の中で (155) 観音山鳥日誌④	谷畑 藤男	23	24
植物をミクロで見る (4) ウキヤガラ	青木 雅夫	24	24
赤城山のツキノワグマ	関 敏雄	24	25
事務局日誌 (163) ・事務局だより			

りますが、私達の進める自然の意味と貴重を知り、守ろうとする働きも同様の内容が問われていきます。ようやく山―森―里山―河川―海、そして大気のそれぞれ単独の存在として受け止めてきたファクターに、見えなかつたつながりが見えてきたようです。

アケマシテオメデトウゴザイマスの挨拶を沖繩の那覇では「うわかくなみそーち」(お若くおなりになった)と言うそうです。昔、那覇で聞いた事を思い出します。この意味はわかりませんが、文化としての考え方、表し方もしれません。ユニークで明るい表現ですね。

毎日、毎年願う豊かな人生、平安を願う人生も結局は自らが創りあげ、それを自らが選ぶものです。温故知新。未来のため過去に学ぶ、気持を忘れず過ごしたいものです。

むら雲は しずまり行きて日の光

まどかになりぬ 年は明けぬと

齊藤茂吉



## 尾瀬・景鶴山

関 敏雄

景鶴山は尾瀬ヶ原の北西にある山で、以前は登山道があったが、昭和42年に自然保護のため入山禁止となり今は廃道になっている。

昭和47年4月28日に県庁に勤める友人と登った記録を見つけ当時を懐かしく思い出した。

夜0時30分、我がおんぼろジムニーで渋川を出発。幌の隙間から冷たい風が吹き込んでくる。古毛布を肩にかけ寒さに震えながら運転する。2時50分、津奈木沢から鳩待峠に登る坂道で、登山者3人が乗った品川ナンバーの車が雪道でスリップして道を塞いでいる。我がジムニーはスパイクタイヤを履いて来たが、彼等は無謀にもノーマルタイヤだ。トラブルの車は5人で押して、何とか道路の端に退け通行可能にする。

3時30分鳩待峠の駐車場着。既に10台位駐車していて、4人のスキーヤーがラーメンを食べている。聞けば至仏山を滑るといふ。

身支度を整え4時出発。雪が締まってアイゼンも輪かんも付けずに歩くこと40分で山ノ

鼻に到着。朝飯のお握りを食べていると、大きなリュックを横に置き、テントの前にいる登山者にコーヒを勧められる。話を聞けば二日で丹後山から平ヶ岳を登り、景鶴山を縦走して来た由。今日は至仏山に行くという。

景鶴山はヨツピのつり橋からヨサク沢行きケイズル沢に入り景鶴尾根に出るのが早く、雪も締まっていて、トレースもあると言い私の地図にコースを書いてくれた。5時20分互いの無事を祈り出発する。朝霧の尾瀬ヶ原はどこを歩いても埋まることもない雪面……

ヨツピを目指して快適に歩く。6時10分ヨツピ着。橋は踏板が外されているので鉄骨の上をワイヤーにつかまり、蟹の横這いよろしく渡りきる。ここで煙草を一服する。緊張した後のピースは旨い。

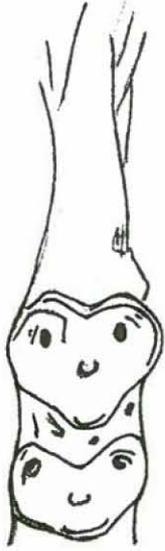
本来のコースは右に行く東電小屋から与作岳経由で登るのだが、ここから真っ直ぐに明瞭なトレースがある。さつき教えてもらったコースだ。かなり広いヨサク沢から、左のケイズル沢へ入る。なだらかな雪の沢をトレース頼りに行き、右の急斜面を登る。傾斜角45度はあるであろうか。アイゼンも付けず喘ぎながら登る。登るにつれて霞んではいるが眼前一杯に尾瀬ヶ原が広がって見えてくる。8

時10分景鶴尾根に出る。ここで煙草に火を灯す。疲れた後のピースの一本は限りなく旨い。10分ほど行くと与作岳からのコースと合流し景鶴山は眼の前だ。頂上直下の狭い雪稜でアイゼンを着け、大岩を右から巻くと、ひよつこり出たところが頂上だった。

8時40分、待望の景鶴山頂だ。周りの山は霞んで見えないが、満足な時間を過ごしてから降る。登って来た時に見たヨサク沢のトレースが気になり、そこを降ろうと決める。急な斜面なので下りは早い。途中からカモシカの尻皮で尻セードして楽しんだ。

頂上からヨツピまで50分で到着。牛首で景鶴山に別れを告げ雪原を歩くが、融雪で歩き難くて、鳩待着は12時近かった。休憩もそこそこにジムニーに乗り込み家路に向かう。

帰路、朝出会った品川ナンバーの乗用車は、まだそのままの状態、少し心配になった。



## 富士見峠から皿伏山へ

亀井 健一

さらふせやま  
皿伏山は尾瀬沼の岸边と富士見峠とのほぼ中間に位置する標高1917mの山である。

皿伏山に登ろうと考えたのは、群馬百名山の登山が残り数山になり、その中に皿伏山が入っていたからである。

この山がどんな山か想像してみた。山名から判断して皿を伏せたような山、つまり山頂はなだらかであり、標高を考えれば、山頂部は亜高山帯に入り亜高山帯針葉樹林になる。ほぼ平らな山頂は、オオシラビソやササが茂っていて眺望はきかないだろうと思った。この標高でも山頂が岩峰になっていけば、高木や亜高木は生えないから、眺望がよいのだがとも思った。

大清水から尾瀬沼をかすめて大清水水平経由で登ろうと考えていたのだが、台風の影響で一部通れないところがあるとの情報が入った。富士見下から入り富士見峠、白尾山経由で登ることにした。富士見下と富士見峠間の往復は林道歩きが長くなる。

所要時間が長く、日帰り登山は無理と判断。

結局、23年9月中旬、県民リポーターの友人と富士見小屋1泊のプランで出発した。林道の途中、2人の青年と遭った。すごい速さで後から追い付き通り越して行った。我々がのろいのは、植物などを観察しながらだから、やむを得ないと思いつつ歩いた。この林道は花が多いのだが今はなく、ブナ、ナナカマド、キハダなどが実をつけていた。

初日はアヤマ平に行った。すでに草紅葉が始まっていた。湿原や池塘越しに燧ヶ岳、景鶴山、平ヶ岳、至仏山などが遠望できた。まさに絶景だ。一方、営々と続けられてきた湿原復元作業の成果を見て、救われる思いだった。若いころ、この湿原に入り込み、ぐしゃぐしゃに踏みつぶしたことを思い出したのである。

小屋では主人、萩原さんから昔の尾瀬や富士見小屋のこと、自然保護に関することなどを聞いた。私からは昔、この小屋に泊ったこと、退職後尾瀬保護財団のボランティアをしていたことを話した。話しつながらあると、昔から親しい間柄のような気になるから不思議だ。聞いていた通り、辺りが暗くなってきたとき、調理場にヤマネが現われた。く

りくりした目が愛らしかった。

朝早く小屋を出発。すぐにマイクロウエーブのアンテナの所についた。ここを過ぎて、富士見小屋から1時間ほどで、針葉樹やササの茂る白尾山に到着。ゆるい登りが続き、標識がなければ、どこが山頂か分からないような山であった。途中、オヤマリンドウの終わりの花、ゴゼンタチバナの紅い実、シラタマノキの白い実などがあつた。

白尾山からは林内の急斜面を足早に下り、両山の鞍部であるセン沢田代についた。田代と言つても乾いた草地だった。ここを過ぎると、今度は林内の急斜面をジグザグに登り、急速に高度を上げて、白尾山から約1時間で皿伏山に到着した。山頂は平らでオオシラビソが林立する森が広がり、これも山頂らしく



なかつた。

しばらく山頂の森を観察したが、あまりに静かで、クマが出そうな雰囲気、人の多い尾瀬ヶ原とは別世界だった。富士見峠と山頂間、人にもクマにも遭わない静かな登山であつた。静かな登山を望むのであれば、富士見峠経由の皿伏山は有力な候補だ。

## 尾瀬至仏山から 笠ヶ岳の思い出

浅川 千佳夫

至仏山のことを書くように言われたが、群馬県自然保護連盟の活動での思い出となると、どうしても笠ヶ岳をはずすことができない。そこで至仏山の途中から笠ヶ岳へのコースについて思い出すままに記す。

「群馬の自然」No.30(1978秋)P.17に書かれているように、同年9月2日〜3日に催された自然観察教室は、尾瀬至仏山で行なわれた。9月2日に尾瀬戸倉にある「ロッジあすなる」に泊り、翌3日至仏山へ登つたのだが、その際に至仏山及び笠ヶ岳の各1地点に群馬県からの受託である自然環境保全地域を示す看板立てを行なつた。けっこうな重さのある

鉄製看板1枚と柱2本を2ヶ所分交代しながら背負つて登つた。私は20歳代と若かつたし柱1本だったので、それほどには重みを感じずに登りあげたが、後にも先にも初めての経験であつた。

その3年後の1981年には、国体山岳コースを笠ヶ岳片藤沼近くに設定するとのことで、現地視察を関係者と同行した(「群馬の自然」No.43(1982冬)p.8)。鳩待峠に集合して至仏山への途中から笠ヶ岳へ登る、前述と同じコースを歩いた。この日はあいにく台風が通過する予想で、風雨が次第に強まる中を強行した。視察を終え高崎に戻してみると、大雨の影響が出ており、市内を流れる烏川は水量が増えて橋のすぐ下にまで達しており、ここごとく橋は通行止めになっていた。

尾瀬至仏山と笠ヶ岳のことを思うたびに以上の2つのことが、連盟の活動史の中では思い出される。あれから30年以上が経過したが、私の記憶から抜け落ちることはない。おそらく至仏山も笠ヶ岳もその当時とあまり変わっていないだろうと思いたい。せつかく重い思いをして取り付けた看板の効果を、少しは感じられたらと思いたいから。その確認をするためにも、もう一度登りに行つてこよう。

# 尾瀬・笠ヶ岳

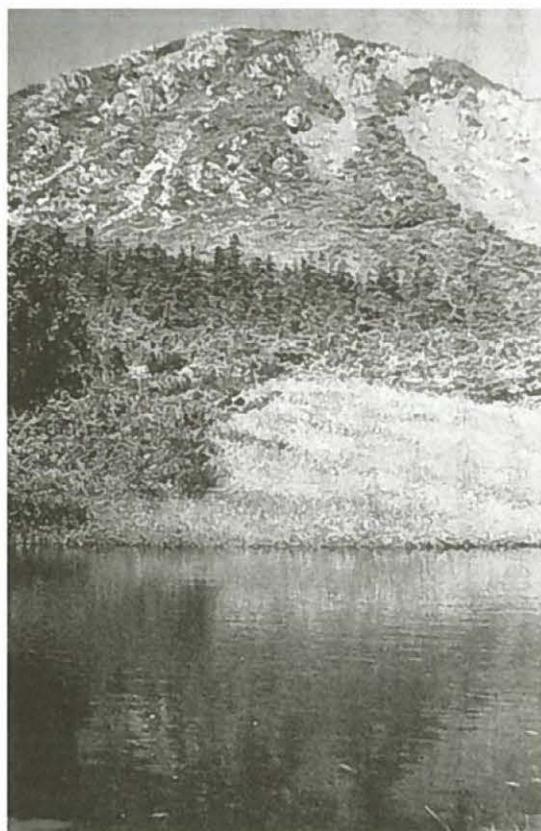
須藤 志成幸

尾瀬・笠ヶ岳(2057・5m)は、至仏山から南に連なる小さな山陵の南端にある。七、八月に訪れると至仏山同様、蛇紋岩という特異な岩体からなる山頂部にはホソバヒナウスユキソウ等至仏山にある植物の大半を見ることが出来る。また眺望や美しい池塘も充分に満喫できる。

笠ヶ岳へは鳩待峠から至仏山へ登る途中の悪沢岳から左に折れ、2km程の距離である。

悪沢のオオシラビソ林をすぎて南側の草原地帯に出ると三角形のピークが二つ並んでいるのが見える。前方の小さい方が小笠、奥の大きい方が笠ヶ岳である。二つとも蛇紋岩地帯の風衝地帯であるため樹木は大きく育たず夏でも山肌を露にしている。

小笠の頂からは、北に至仏山、北西には利根の源流に連なる三国山脈、そして南には泰然と裾を引く武尊山、東方にはアヤマメ平から燧ヶ岳、日光白根山へと続く原生林が見える。群馬県にもこんな素晴らしい自然そのもの、緑深



尾瀬・笠ヶ岳(片藤沼より)

低木林に囲まれ、片藤沼とホタル池があり、小さな湿原も広がっている。

写真は片藤沼から笠ヶ岳を望んだものである。静かな水面に山体がゆれ、周囲のヌマガヤ等が風にそよいでいる。笠ヶ岳は尾瀬の中でも一番静かで美しい所かも知れない。

片藤沼には以前山小屋

い眺望があつたのだと時を忘れ、しばし、しみじみと見入ってしまう。その小笠からオオシラビソの林を越えるとそこが笠ヶ岳である。至仏山の左肩に小至仏山があるが、ある意味笠ヶ岳も小至仏山といつていいと思う。それは至仏山を小さくし、池塘を添えた花園だからだ。

笠ヶ岳は、東面と西面とではその様子は大分異なる。西面は風衝作用が強いのでコマツガを中心とした高山低木(ハイマツ、ハクサンシヤクナゲ、イワシモツケ、タカネバラ)が樹高1mほどの高さで群落をつくっている。東面はオオシラビソ林が標高1,900mあたりまで伸びて、その上限ほどのところにその

があり、池塘の踏みつけがあつたがホタル池は入る人もほとんどなく黄色いキンコウカ、モウセンゴケ、イワイチョウ、紫色のヒオウギアヤマ等が群落をつくつて咲いている。

また、笠ヶ岳山頂部には蛇紋岩地特有の植物、白いホソバヒナウスユキソウ、紅紫色のタカネナデシコ、黄色いキンロバイがそれぞれ美しく花を咲かせている。キンロバイは岩にはり着くように生えている。

昭和四十九年八月、この山の山頂で群馬に尾瀬にしかないカンチコウゾリナをはじめに見つけた。植物調査が充分されてない笠ヶ岳にはまだ新しいものがあるかも知れないと、そんな期待をもって登つたのだ。カンチコウ

ゾリナは草丈30cm程で茎の先きに黄色い頭状花をつけ、茎に剛毛があるのが特徴である。その時は十株ほどであったが数年後に行ってみると山頂部一帯に広がっていた。

現状でもあの静けさと植物たちがそのままの姿でいてくれることを願っている。

## 尾瀬笠ヶ岳二〇五八m

卯木 達朗

尾瀬に行かれた方、戸倉から湯の小屋へ抜ける坤六峠、武尊山頂等から眺める尾瀬笠ヶ岳、山頂の笠の部分が岩壁で樹林内からおどり出ている山容は魅力たっぷり、山好きな人には一度は訪れてみたい山である。

たいへん古い山行で恐縮だが、私が山に魅せられ今日まで続けられているのもこの笠ヶ岳山行がはじまりといっても過言ではない。

昭和29年7月15日、もう半世紀も前のことである。

上越線湯檜曾駅に下りる。一行は高崎商業山岳部の私を含んだ4名である。高校生なので金がない。で湯の小屋まで利根川ぞいに歩く。途中藤原ダムの建設工事で何度かハッパ

の時間帯にかなり立ち止めをくう。いまでは考えられぬ行為で、お上の仕事だという命令調で1時間以上何ヶ所かで行動を阻止される。

湯の小屋温泉の湯の小屋沢、当時は木の根沢といい地図にものっていたが、いつのころからか湯の小屋沢に改名されていた。ここですべを張って一泊。仲間が釣った一尾のイワナを4人で取り合つての夕食。

翌日、笠ヶ岳をめざして楢俣川左岸をのぼる。ところどころに登山路を示す矢印があるが途中から小楢俣川にのる。現在このコースは咲倉コースといい奥利根山岳会が笹刈りをして登山コースの整備をやっているの歩きやすくなっているが、当時はケモノ道そのままの荒れ放題のコースで、まさに一日中ヤブこぎであった。全員17歳の若さで血気さかんである。しかしあまりにもリュックが重かった。リュックの中身がいまとまったく違うのである。軽いインスタント食品がまったくない時代で、コメ、ミソ、シウウユからカン詰めに至るまで重量のある食料である。下着の替えとテント用具、それが一週間分である。

一人約30キロ近くはあったと思う。本来の計画では笠ヶ岳をのぼり至仏から尾瀬ヶ原へと下り山の鼻で野営のはずだった。がまった

くあてが外れたのである。笠ヶ岳の尖峰のふもとに着いた時は、はや夕刻であった。ひらけた稜線上にある湿原、ここに一周約20分位の美しい沼があった。ホタル池という。湿原植物がある沼は夕焼けに映えて疲れを忘れさせてくれる美しさであった。(注・現在片品村と水上町藤原の境界線上にあるという理由で片藤沼と変名されている) 夕食はホタル池の水でミソ汁とカレーである。カンテラのわずかな光での食事。仲間の一人が「卯木が作ったミソ汁はナメコが入ってうめえなあー」という。ナメコなど持ってきていないのに何と間違えてるのか？考えてみてわかったことはホタル池の水にあった。オタマジャクシが多量に入っていたのである。

翌日、朝食前に笠ヶ岳の岩稜を登る。岩壁一面を被うように繁茂するミヤマビヤクシンは見事であった。そこにはカヤクグリの鈴の音のさえざりがあった。山頂から見下ろすホタル池の水面が朝陽にかがやき、そこからルビタキの高貴なひびきが森々に浸透する。天空にはアマツバメの乱飛があった。

後ろ髪を引かれる思いで笠ヶ岳を後に小笠をまき、ぬかるみの多い稜線をオヤマ沢田代へと、さらに至仏、尾瀬ヶ原、燧ヶ岳、尾瀬

沼へと青春をかざる旅が一週間も続く。

追記 当時の山行を含めた鳥の記録は、昭和30年代前半の日本野鳥の会本部機関紙「野鳥」に掲載。

## 鬼怒沼山

齊藤 長作

栃木県境の奥深く、原生林に包まれて、展望も花も無い鬼怒沼山が群馬百名山に数えられたのは不思議です。山頂まで登った事のある人は少ないと思う。だが、この山の魅力は山頂ではなく、そこへ至る途中にあります。

栃木県側からは奥鬼怒温泉郷の最奥、日光沢温泉から、標高二千mをこえる日本一高い高層湿原の鬼怒沼湿原を通り、群馬県側は、大清水から、標高差九百m強を一直線に昇り切る物見山を経る、かなり強行なコースにあります。湿原と急登、この二つの異なる登山コースが地味な鬼怒沼山を引き立てています。

毎年、六月第一土曜日の尾瀬ゴミ持ち帰りキャンペーンの大清水口ポランティアに参加した後の余剰時間を使って、大清水周辺の沢や山を登っています。根羽沢支流の沢は、ど

の沢も沢登りの対象をしては、いまひとつですが、なんと言つても、大清水から湯沢の丸太橋を渡つて、物見山は登る急登は、アズマシャクナゲの花の回廊を行くごとく、大群生地です。とりわけ、ここのシャクナゲは木が多く、それはみごとな咲き誇りです。所々、展望の開ける尾根道から眺める湯沢の奥壁斜面も一面にシャクナゲの花色に染まっています。又、足元にはラショウモンカズラ、イワツツジ、樹間にはアカヤシオやアブラツツジも咲き、「山は登るもの」としか知らない私

でも、きれいだ！素晴らしい！と感じます。この景色をどなたにも、見せてあげたいと思いますが、なにしろ急登で、まちがいに健脚向きののが残念。

物見山も展望は無く、暗い山頂ですが、鬼怒沼湿原へは樹林帯を少し下って、登り返し二〇分程で湿原の上端へ出ます。しかし、積雪の多い年は、樹林帯の中、夏道がまったく出ていない時があり、コンパスを使った読図力が必要になります。

湿原の上端の栃木県側ルートとの合流点に



は無人の避難小屋があり、数少ない訪問者を迎えてくれます。これから先は、樹林の中を往復二時間弱で鬼怒沼山へ登るのですが、多くの登山者は、ピークハントはしないで、小屋から下山しているようです。

六月初旬の湿原は、まだ雪がとけたばかりで、花は無く、やっと、一つ二つと、タテヤマリンドウとヒメシヤクナゲの小さな花を探し当てる程です。

平成十八年六月三日に登った時は豪雪の年で、物見山山頂も、1m以上の残雪で埋まっています。雪崩でやられたのでしょうか、湯沢の渡渉の丸太橋には、みごとに三段角の鹿の死体が白骨化して引つかかっています。

又、近年尾瀬大清水口登山客増員の試みに根羽沢金鉱山跡は散策路を付ける等、物見山登山口周辺の再開発の話も、地元で出ているようです。



## 尾瀬ヶ原の魚

片山 満秋

尾瀬ヶ原の河川や池から5種の魚類が記録されています。河川にはイワナ、ヤマメとアブラハヤが、池塘にはアブラハヤやギンブナが、水たまりや小川にはドジョウが生息していました。しかしヤマメは一昨年(2009)から激減しており、近いうちに尾瀬ヶ原の河川からは姿を消すものとみられます。

私は1976(昭和51)年から2011年3月までの35年間、群馬県尾瀬保護専門委員として尾瀬ヶ原の河川や池塘の調査を行ってきました。池塘では主に甲殻類プランクトン(ミジンコやケンミジンコのなかま)の組成や分布状況を調べました。河川では、公衆トイレや山小屋からの生活排水が、河川の生物にどのような影響を与えているかを調べたのです。

尾瀬ヶ原の西端には水洗式の山ノ鼻公衆トイレがあり、山小屋の尿尿や雑排水も併せて浄化しています。浄化された排水はビニルパイプを通して川上川に注がれています。現在

の山ノ鼻の水洗式公衆トイレは2代目です。1978年から使用を開始した初代の水洗式公衆トイレの排水は猫又川に放出されていました。(1977年以前の公衆トイレは「くみ取り式」で、くみ取った尿尿は近くの林に埋めて処理をしていました)。

この水洗式公衆トイレからの排水が河川に入るとどのように分解が進み、河川に生息する生物にどのような影響を与えているのかを調べたのですが、そのときに用いた指標の一つが「魚類の分布状況」でした。

(1) ヤマメについて

1970年代以前は尾瀬ヶ原の河川に生息するサケ科魚類はイワナだけで、ヤマメは記録されていませんでした。尾瀬ヶ原に漁業権を持つ漁業組合は1970代から尾瀬沼にはヤマメを放流していましたが、1983年から尾瀬沼とともに尾瀬ヶ原の猫又川やヨツピ川にもヤマメを放流するようになりました。

初代(1978年～1995年)の水洗式公衆トイレの排水は、山ノ鼻見本園の東端を蛇行して流れる小川を経由して猫又川に注いでいました。この小川にはイワナが数多く生息しており、ほとんど人を恐れず、流速を測定するために流す木片にまで飛びついて調査に

支障があるほどでした。

ところが1985年の調査のときに、この小川で初めてヤマメが確認されました。このヤマメは体長が15cm以上もある大型で、イワナとは離れた位置を占拠し単独行動をとっていたようです。近くにはイワナもいましたが、落下した昆虫はこのヤマメがイワナを押しつけるようにして食っていました。ヤマメはこの小川でイワナやアブラハヤとともに、1985年以降からは連続して確認されていました。

ところで、ヤマメはイワナより成長が早く、川の中では体の大きな魚は餌が得られやすい場所を占拠して他の個体を追い払います。1996年から2代目の公



イワナ



ヤマメ

衆トイレが使用され、その排水は川上川に流入するようになりました。そしてこのトイレ排水に含まれる栄養塩類で川上川の藻類をはじめ水生生物の量が多くなり、魚類にとつては餌の得やすい場所になりました。イワナとヤマメは河川の上流部の冷水域に生息する魚類です。両種が分布する河川では、一般には水温の低い上流部にイワナが、水温の高い下流部にはヤマメが分布するという

「すみわけ」がみられます。イワナだけ分布する河川では、下流までイワナが分布していません。また、ヤマメだけ分布する河川では、通常はイワナの生息場所になっている上流にまで分布します。したがって「すみわけ」は、同じような餌や生息場所を必要とするイワナとヤマメにとつて、余分な競争や闘争に伴うエネルギー消費を避ける意味もあるようです。

調査していた尾瀬ヶ原の河川では夏の水温12〜14℃がイワナとヤマメの分布境界でした。山ノ鼻公衆トイレの排水が流入する川上川の水温は15℃前後で、イワナとヤマメの分布境界に近い微妙な場所でした。

前述のように、尾瀬ヶ原の河川のサケ科魚類はイワナのみで、ヤマメはいなかったため、当然この場所の川上川はイワナだけが分布していたのです。ところが、この場所がヤマメの優占する場所になり、イワナの姿はほとんど見られなくなってしまったのです。

ときどき大きなイワナが川の深みにいることがありました。しかし流れてくる昆虫などの餌は、この深みの上流部に位置するヤマメがほとんど独占して食っていました。

分布境界に相当する(高い)水温では、ヤマメの方がイワナより活動が活発で優位に立

つことができるからようです。実際に川上川で、ヤマメが優占する場所は川上橋辺から下流で、猫又川合流点付近まででした。また川上橋から約500m上流になるとイワナだけの分布域になっていました。このようなイワナとヤマメの分布状況は2008年まで継続して確認されました。

川上川や猫又川ではイワナやアブラハヤの稚魚が岸辺近くの緩やかな流れで見られますが、ヤマメの稚魚は確認されたことはなく、ヤマメは尾瀬ヶ原の河川では繁殖していません。低い水温が主な原因と思われま

す。尾瀬は国立公園であり、たとえ「枝一本であっても持ち込み、持ち出しは禁止」とされ、生物の出入は厳しく制限されています。にもかかわらず、なぜ魚類は堂々と持ち込まれ放流されてきたのでしょうか。しかも、尾瀬地域では魚類の採取、例えば魚釣りは原則的には禁止事項ではありません。あれだけ厳しい「保護」がなされているにもかかわらず。

現在は尾瀬ヶ原の河川で釣りをしている人は見られませんが、原則的には魚釣りは違反・違法行為ではありません。尾瀬ヶ原の河川に漁業権を持つ漁業組合が、許可を出さない

め現状は「釣り」が自粛状態にあるのです。漁業権を維持するには「その水域の魚類を維持し保護増殖」のため「魚の放流義務」があるのです。この義務に従ってヤマメも放流されてきたのです。すなわち「特別天然記念物 尾瀬」といつても、漁業権は別です。

〔天然記念物の尾瀬地域の大部分は東京電力の所有地（国有地でない）であり、関連会社の尾瀬林業が管理しています。したがって東京電力所有地の木道敷設や補修も、同社によつて行なわれているのです。2011年3月11日の東日本大震災に伴い福島第一原子力発電所で事故が起き、危険な放射性物質が広い地域にバラ撒かれて甚大な被害が続出しています。この被害に対し東京電力は補償することになります。したがって、以前と同じような木道整備などの事業は大きく影響されることになるでしょう。〕

ところで尾瀬は「特別保護地域」でありながら、河川の魚類問題は別だというのは保護政策や活動の一貫性を欠くことでもあり、一般の人たちにとつて理解しにくく、簡単には納得が得られないでしょう。また、放流するために持ち込む魚類に伴って、予想もしない生物が紛れ込むこともあるでしょう。「枝一

本の持ち込み、持ち出しさえも」許さないで保護するのであれば、魚類に関しても同様の扱いをするのがよいはずですし、保護政策の一貫性につながります。（と長年にわたり提議し続けてきたのです。）

ということ、ようやく2008年から尾瀬地域の河川にはイワナやヤマメなどの放流が行われなくなりました。そのかわりとして、「魚類の維持・増殖」のため川上川にイワナの産卵床が設置されました。

ヤマメの寿命は4〜5年です。尾瀬ヶ原の河川ではヤマメの稚魚が確認されないことから、イワナやアブラハヤのような自然繁殖はないとみられます。実際に、翌年（2009年）からヤマメが激減し、2010年には山ノ鼻地区の山小屋近くで数多く見られたヤマメも完全に姿を消しており、わずか1個体が猫又川で確認されただけでした。そして山ノ鼻公衆トイレの排水が流入する川上川で確認されたのはアブラハヤとイワナだけでした。

ヤマメがいなくなれば、尾瀬ヶ原の河川は以前と同様にイワナとアブラハヤが生息・分布する水域になるはずですが、これで「尾瀬の自然保護」が、一般の人たちにも分かりやすい、一貫性をもつことになりました。

(2) 尾瀬地域の魚類分布

尾瀬地域には「地域的な特徴をもった」イワナが生息していたそうです。しかし尾瀬沼や尾瀬ヶ原の河川に生息するイワナやアブラハヤも、かつては、人の手によって移入されたものと考えられます。

尾瀬ヶ原の河川の水は平滑ノ滝や三条ノ滝を流れて只見川に入ります。只見川は巨大なイワナの生息地として知られています。とはいえイワナが只見川から、あの大きな落差を有する三条の滝を遡って、尾瀬ヶ原に入ったとはとても考えられません。きっと昔の人達が運び込んだものと思われまます。生かしたまま移動するのですから、当時の技術からして尾瀬地域の近くの川に生息していた個体だったのでしょうか。この移植された個体群が隔離された状態で長い年月を経て、尾瀬地域特有の形態や性質を持ったイワナになっていたものと考えられます。

しかし、前述のような近年における魚類の移入で、以前から生息していた個体との交雑により遺伝的な変化や攪乱が生じていたのでしょう。山の人は以前から、尾瀬には純粋なイワナはいないと言っていました。今後、他の地域からの移入がなく、隔離状態が続け

ばいつの日か尾瀬特有のイワナやアブラハヤが生息・分布することになるでしょう。

(3) 呼び名など

地域によって魚類の呼び名は異なることがあります。オイカワやウグイなどは全て「ハヤ」と呼ばれたり、小魚は全て「メダカ」とされたりと。尾瀬地域ではアブラハヤをボヤと呼んでいます。ボヤツ堀という小川もあります。「竜宮」に群れている魚の大部分は、このアブラハヤ(ボヤ)です。大きなイワナがボヤの群に近づくことがあります、行動の様子はかなり異なります。尾瀬ヶ原では比較的緩やかな小川(ボヤ堀など)にボヤが見られます。尾瀬ヶ原の河川で繁殖をしており、稚魚も見られました。

このアブラハヤは、地域によってはクソバエとも呼ばれています。体の側面にやや汚れたような黒い斑点があるからかも知れませんが。

なお、ギンブナは限られた池塘だけに、ドジョウは山ノ鼻見本園の木道沿いの小川に生息しています。

(4) イワナとヤマメの区別点

イワナは「胸ビレ」の付け根から先端にかけて縁が白いので、ヤマメと区別できます。しかしサケ科の魚類では、イワナと同じよう

に胸ビレの縁が白い種(例えば外来魚のカワマス)がいるので注意が必要です。

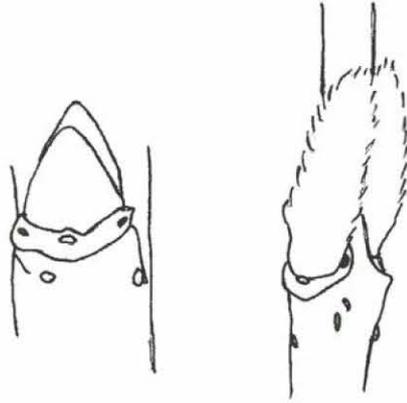
海に下る前のサケ類(サーモン)の子をパー(par)といい、この子魚の体側(横腹)に見られる黒っぽい、だ円形(形)の斑点をパーマークとよんでいます。ヤマメの横腹部分にはこのパーマークという、黒い縦長の斑点があり、胸ビレの縁は白くはありません。そこで「胸ビレの色」と「パーマークの有無」を確認すれば、イワナとヤマメはほぼ識別できます。現地では双眼鏡を使って識別することもありました。

このパーマークはイワナの稚魚にもあります。しかし稚魚は成長したヤマメやイワナが生息する急流に出てくることはありません。出てくれば大きなイワナやヤマメなどによって食われてしまうでしょう。

尾瀬ヶ原の河川では、イワナやアブラハヤの稚魚は川の岸辺近くの緩やかな場所に群れています。しかし、同じ河川ではアブラハヤの稚魚は下流に、イワナの稚魚は主に上流で見られました。

鳩待峠から山ノ鼻に下って、川上橋を渡ります。橋の上から川をのぞくと魚が見られることがあります。

そのとき魚の「胸ビレ」と「横腹」を注意して見て下さい。きつとその魚の「胸ビレ」の前の縁は白く、「横腹」にはパーマークがないでしょう。その魚はイワナと思います。複数いれば、上流から下流に向かって大ききの順に位置して泳いでいるのが見られるかも知れません。イワナは流れてくる昆虫などが主な餌なので、上流に位置する場所は餌にあり付け易くて有利なため、大きくて力の強いのがこの場所を占有するのです。



## 環境教育プログラム

# 魚沼から行く尾瀬

魚沼小千谷地域 理科教育センター専任所員 今井 隆夫

標記のプログラムは、平成21年度に新潟県魚沼地域振興局が中心になって、地域の振興を目指して制作しました。このプログラムの制作にかかわったので紹介します。

プログラムは、子ども達を内面から成長させることを狙った自然体験学習プログラムになるように制作しました。

このルートは、船を使用します。奥只見湖を船で渡り（40分）、湖の端にある尾瀬口船着場から会津の乗合バスを利用し、御池経由で沼山休憩場まで（65分）行き、そこから徒歩で尾瀬沼に（70分）はいります。

児童は船上で奥只見の歴史を学びながら、尾瀬を代表する百名山の一つである燧ヶ岳を見て歓声を上げます。標高の通りに右に柴安<sup>しばやす</sup>から<sup>まないたくら</sup>俎<sup>くら</sup>と二のピークが見えます。尾瀬沼からは高さが逆に見えます。

児童は、ガイドブックや観察の目安になる尾瀬沼の地図（写真1）を一人一人が持って説明を受けたり、課題に取り組んだりして十

人に一人の学習ガイドと一緒に歩きます。第1日目の行程は、尾瀬沼東岸（70分）に到着後、ビジターセンターを見学したり、センターの職員から尾瀬全体についてのレクチャーを受けたりしてこの日は東岸に宿泊します。

2日目は天候を見ながら、天候がよければガイドと一緒に南岸廻りで尾瀬沼を一周（150分）し、東岸に戻って昼食をとり、その後沼山峠を経て沼山休憩所へ（70分）。そして乗合バスで尾瀬口（65分）に、船で奥只見湖を渡り（40分）、最後にバスで帰校するコースです。

天候が悪い場合は、尾瀬沼北岸経由の沼尻湿原往復コース（120分）を実施します。

もう一つのコースは（写真2）、1日目は奥只見湖から尾瀬沼東岸までは尾瀬沼コースと同じですが、東岸で昼食。その後、尾瀬沼の北岸を通り沼尻湿原を横目で見て、一気に見晴（180分）まで歩いて、そこで宿泊します。

2日目、見晴十字路から下田代・中田代・上田代と縦走（120分）し、山ノ鼻で昼食を取り、植物研究見本園やビジターセンターを見学します。その後、鳩待峠（90分）まで歩き、シャトルバスで尾瀬戸倉（35分）まで行き、そこから学校がチャーターしたバスで沼田から高速道路を使って学校まで帰るとい

写真1



行程です。

プログラムのスタートとなった昨年は、県内の学校への紹介を兼ねて、希望する学校代表を2回に分けて事前に尾瀬沼をご案内し、尾瀬における環境学習の有効性について検証いただき、高評価を得ました。

同時に、魚沼市では昨年からは魚沼自然環境推進事業として「魚沼尾瀬学校」を市内の小・学校五年生全員を対象に企画しました。各小・学校は、学習プログラムを使って魚沼ルートで尾瀬に入り、一泊二日の行程で環境学習を

写真2



実施しました。市内の小・学校では、両方のコースを実施しています。

また、二年目の今年は、県の環境学習プログラムパイロット事業として取り上げ、魚沼市以外の小・学校からも応募いただき、九校がプログラムを使った環境学習を計画しました。が、七月末の新潟・福島豪雨の影響を受け、三校が実施出来ませんでした。事業への参加により、ガイドと船・バス料金の補助を受け、約十人に一人のガイドを用意したいと事務

局（魚沼・小千谷地域理科教育センター内）を中心に学習ガイドを募集し、魚沼市で調査活動やガイドをしている自然大学の皆さんと退職された教職員の皆さんから応募いただきました。

プログラム実施上の事前調査を兼ねて、六月に尾瀬沼コースと尾瀬ヶ原コースの二回の研修会を行い、参加した38名の方からガイドとして登録いただきました。今年の実施校の中で、一番多くガイドが同行したのは10名でした。

今年実施した学校の児童は、その感想をいろいろな形で表現しています。

尾瀬で感動したことを担当したガイドに手紙やメッセージで伝えたり、尾瀬で発見したことや学習したことを尾瀬新聞にして校内で発表し合ったりしていました。

また、魚沼市では12月4日に魚沼市子ども環境フォーラムを開催し、五校の児童たちが300名の聴衆の前で、今年の「魚沼尾瀬学校」の成果を発表しました。

児童の発表の中で、共通している点の一つ目は「もう一度行きたいこと」。二つ目は、自分たちの周りの自然を大切にしていきたいと思ったこと。三つ目は、ゴミを少なくした

## 行事報告

8月6、7日実施

木曾駒ヶ岳

自然観察教室に参加して

高野 賢一

いこと。四つ目は、自然を大切にするため、自分達にできることを学校や家庭で実践したいことでした。

児童が尾瀬で学んだ「尾瀬のマナー」「森林の変遷」「湿原の中の小さな植物」「雪や水の大切さ」「ゴミ持ち帰りや尾瀬のトイレの大切さ」などを六年生以降の生活に生かし、身近な自然を大切にする実践ができる子ども達に育って欲しいと学習ガイド全員が期待しています。

この環境学習プログラムをご覧になりたい方は、インターネットで「魚沼から行く尾瀬」で検索し、ホームページで「環境学習サイト」をお開きください。プログラムのパンフレット、地図2種類、事前事後学習用プリント、教師用手引書がダウンロードできます。

今年、新潟・福島豪雨で福島県と新潟県の県境にあった金泉橋が流され、八月以降の魚沼ルートは実施できませんでした。しかし、新潟県の主導で十月には、仮の橋げたが出来、来年の予定通り魚沼ルートは再開通できるようです。

貴連盟の皆様から、機会がありましたら、是非「魚沼ルート」で尾瀬を満喫いただきたくと思います。きつと、「尾瀬学校」の子ども達と出会う事でしょう。お待ちしております。

群馬県は猛暑の日々が続く8月6日の夜、

長野県木曾駒ヶ岳の近くにある木曾駒山荘では、27人の男女が楽しい夕食のひと時を過ごしていました。その日、木曾駒ヶ岳を登頂した群馬県自然保護連盟の会員の一行です。

今年2回行われている「自然観察教室」は、今年、今年東日本大震災直後の4月10日に新潟県の角田山で実施。8月6日、7日にかけて、長野県木曾駒ヶ岳で行われました。

深夜1時、小型貸切バスで高崎を出発。高速を使って早朝、登山口となる駒ヶ根市の菅の台に到着し、そこからシャトルバスに乗り換えロープウェイで「しらび平駅」へ向かう。バスの窓からは、針葉樹林の中で遊ぶニホンザルや、中御所溪谷の深い谷間を眺めることが出来ました。ロープウェイから眼下にツキノワグマも見られ吃驚して内ひくわに千畳敷駅にあつという間に着きました。ここが本当の

登山口となりますが、すでに標高2611mもあり、目の前には高山植物の宝庫である千畳敷カールが広がっています。この標高ではさすがに森林限界で、ナナカマド等の低木の端が登山路で山頂への道が続いています。

シナノキンバイ、ミヤマキンポウゲ、タカネガンナイフウロ、コバイケイソウ、ウサギギク等の高山植物が短い夏を精一杯謳歌し、可憐ながらも力強さを感じさせる乙女とも云える花たちです。特にそう感じたのは、急な登りの「八丁坂」の岩場に咲くコマウスユキソウでした。岩場のほんの僅かな土に、3cm程の星形の花を力強く咲かせていました。この山の代名詞ともいえる貴重な花の一つで、わざわざこの花だけに会いに来る植物愛好家もいるほどです。最もきつい「八丁坂」を登る私達には、疲れを癒してくれる花でした。

「八丁坂」を登りつめ尾根に出ると、周りの山々が望めました。同じ中央アルプスの空木岳が見え、雲の多い中、遙か遠く富士山を望むことが出来ました。尾根には宝剣岳への分岐の山小屋「天狗山荘」があり、その近くに保護されているコマクサが可憐な花を咲かせ、疲れた私達の目を楽しませてくれました。

中岳を経て木曾駒ヶ岳の山頂に着いたのは

午前10時前。晴天なら日本百名山の半分近くが見えるという山頂だが、生憎雲が湧き少しの山しか見渡せませんでした。それでも代わる代わる『二九五六m』と書かれた標識の前で木曾駒ヶ岳登頂の思い出をデジタルカメラのメディアに刻んでいました。

山頂での昼食後、早めに下山して木曾駒高原にある山荘へバスで向いました。その間、多少雨に降られはしたものの無事日本アルプスの一極を登れたことの充実感で大いに盛り上がり、ビールや日本酒など飲みながら遅くまで楽しい語らいが続きました。

会員が楽しめ、また知識の幅が広がる「自然観察教室」を企画し実施してくれた吉田事務局長や関さん、高山植物の解説をしてくれた里見先生、宿泊場所を世話してくれた松村さん、また、観察教室の実施に当たり参加協力してくれた多くの皆さんに感謝を申し上げます。

そして、このような会員が楽しめる「観察教室」を来年も是非実施されるよう希望して止みません。



10月2日実施

## 西御荷鉢山

# 自然観察教室に参加して

板橋 良寛

古くからの信仰の山でもある西御荷鉢山（一二八六米）の自然観察会に10月2日参加してまいりました。

当日は指導員を含め約30名の参加で、大きな鉢のモニュメントの前での御荷鉢山伝説や詩人、尾崎喜八がこの一体を歩いたり御荷鉢を登ったりした「神流川紀行」の紀行文の説明を聞いたあと、曇天のなか配布された資料を手に登山開始。今はスーパー林道も出来、登山道も整備されており途中指導員よりのいくつかの山草名を資料にチェック、又、⊕の字の刈りあとをながめながらも約一時間で不動明王が祀られてある一面芝生の頂上に到着。

頂上では地元の自然会のメンバーからの地方の言い伝え「三束の雨」の話や聞いた、残念ながら曇天のため頂上からは見えなかつたが、オドケ山や武甲、雲取、両神、八ヶ岳方面が天候の良い日は見えることの説明や元旦に御来光を仰ぐ人も多数いるという話を聞いた。又、頂上付近では9月中旬にあった台

風15号が倒木を含め松等に多大な影響を及ぼしてあった。

昼食のあと下山、今回初参加、まして初心者の方は、秋の山野草を含め数種類は覚えようと決めていたので「ヤマボウシとその実」「アオハダとその実」、サラシナショウマ、ミズヒキ、トリカブト等を覚えた。アオハダにはびっくり幹にキズをつけ内皮を見たら中が青くなっているのですその名前がついたと事、下山途中に指導員より「山椒の葉を2、3枚小豆の中に入れると虫が出ない」ことを教わりよい勉強になりました。

舗装された林道では数種類の「カエデの葉を並べて手元の資料と一葉、一葉見比べての勉強会。初心者でも楽しく飛び込めるほんとうに良い自然観察会の日でした。

今回の開催日は良い天候に恵まれることを期待し参加を申し込み帰路に、帰路の途中、鹿にばったり、指導員が話した逃げる鹿は直角に山に登るのを目の当りに見てなおさら次回が楽しみにになりました。



10月30日実施

### 自然観察会「上州三峰山」に参加して

## わが家の裏山？に、驚きの一日

米田 玲子

「上州三峰山」…この山は、わが家の裏庭。いえいえ、畏れ多い！実は、三峰山の北斜面にわが家があります。移住してだいぶ経つというのに一度も登ったことがなく、河内神社もネットで調べるほど…情けないどころか、申し訳ない。

です。この日は、驚きと新たな体験の連続。まず河内神社までの道のりがよく整備されているのに驚き、登り始めのいきなりの急坂に息が切れ、見事な造りの神社に驚き、パラグライダーの離陸地からの眺めにうっとり。

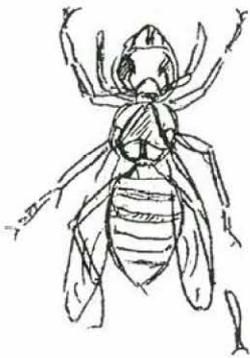
三峰の美しい秋も堪能できました。「カエデは日にかざして、裏から見るときれいですよ。裏見のカエデといいます」と聞いては、さっそく日にかざしてみても「わーっ、きれいー！」。

「黄色く色づくのはカロテンの多い葉、紅く色づくのはアントシアンの多い葉ですって」という説明には、「おーっ、抗酸化力のあるアントシアニンと同じなのかな」と思ったり（調べてみたら、同じようなものだそうです。）

神社脇の大きな木が白樺と聞けば、「わが家の垣根の白樺も、あんなに大きくなるのかー」とビックリ。そうそう、教えていただいたマムシ草。観察会の数日前に庭でマムシを見たのですが、そのすぐ近くにマムシ草がありました。帰宅後改めて観察したら、確かにマムシのような草肌をし、真っ赤な実は鎌首のようです。それにしても、マムシはマムシ草を好むのでしょうか？

長い間憧れていた三峰沼にも合うことができ、里の人たちのために働きつつ静かに秋の木々を映してくれるそのたたくまいに、大いに好感を持ちました。予報より早い雨の訪れに沼のほとりでの昼食となったことは、わたしにとってはうれしいプレゼントでした。

指導員の方には、木々の名前やさまざまなうちくも教えていただき、楽しい一日を過ごさせていただきました。また機会があったら、参加したいと思っています。その前に、わが家から三峰沼をめざしてみようかしら…。



### 植物歳時記 (56)

## マツ(松)

吉田 龍司

### 洞門を彩る松の深みどり

龍司

毎年海外の山を歩く計画をしている。昨年はスケジュールの調整もつかず、体調も悪くて叶わなかったが、10月中旬山仲間から誘われて三泊四日で韓国「雪嶽山」ツアーに参加した。雪嶽山は北朝鮮に近い雪嶽山国立公園の主峰で、標高は1708mと低いが韓国で1、2を競う人気の山である。韓国の植生にも興味があったので出かけたわけだ。

仁川空港から車を走らせながら海岸の植生を見ると、クロマツが主体で日本と同じ松枯れ被害に罹っているものも見受けられた。

内陸山地に入ると、ミズナラ林の中ではアカマツと、チヨウセンゴヨウに混じってシラカンバやカエデの仲間が見られ、ひと際ダンコウバイが目についた。

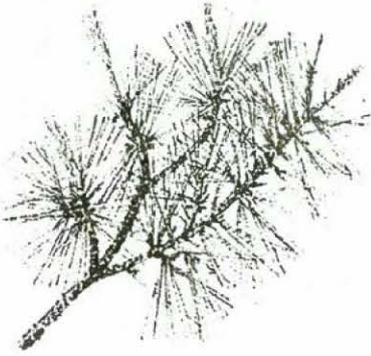
雪嶽山嶺は丁度紅葉の最盛期。錦秋に映える静かな岩峰群は水墨画のようで、日本の山岳風景とは一味違う美しさを醸し出していた。

植生は日本と殆んど変わらないが、種類が少なく失望であった。

この山域で目にした松は4種類。その内訳はクロマツ、アカマツ、チョウセンゴヨウ、ハイマツであり、日本で見かけるものとほぼ同じだった。

マツは分類の世界では植物界(Plantae)、裸子植物門、(Pinophyta)、マツ綱(Pinopsida)、マツ目(Pinales)、マツ科(Pinaceae)、マツ属(Pinus)と降下して最終の種へと学名は続く。Pinaceaeはラテン語で瀝青の意とか。これは松脂からの連想から名付けられたと思われる。

世界におけるマツ属の分布域は、ユーラシア大陸から北米までの北半球全域で、北極圏近くからアジアは南ベトナム、北米ではコスタリカにまで分布するという。マツは主に日



当たりの良い地味の乏しい土地を好み、気候的には亜熱帯(リュウキュウマツ)から高山帯(ハイマツ)までの極めて多様な気象条件に対応している植物。分類上は単維管束亜属(五葉松類)と複維管束亜属(二葉松類)に分けられ115種の種があるという。朝鮮半島は当然マツ属の分布域に入っている。

マツの語源については定説がないのは不思議である。古来より次のような説がある。

- ・常盤木の代表であるので真常(まじょう)といったのが変化してマツになった。
- ・木の寿命が千年も齢を「たもつ」の略転。
- ・霜雪を「待つ」て色改まることがない。
- ・神が木に宿るのを「待つ」から。
- ・葉が二股に分かれているので「股」の転。
- ・尖った葉が群生するので群突(むらつき)の木といった。
- ・祀る、祭りから。
- ・葉が睫毛(まげ)に似ている所から「睫毛」のまつ。
- ・漢字の松を分解すると、木編に公(つつめ)で、葉が細かく間が透けている。こじつけの様な語源もある。

深津 正は『木の名の由来(1993年)』

の中で貝原益軒『大和本草』や、僧契仲の『円珠庵雑記』、曾占春『国史草木昆虫攷』、屋代弘賢の『古今要覽考』、新村出博士の『語源

を探る』など文献をひもとく語源を紹介しているが、重複するので詳細には触れない。

松は日本では長寿を表す縁起の良い木とされ、松、竹、梅の3つを松竹梅と呼び重宝している。しかし中国では松は無骨者扱いで、唯一、秦の始皇帝が雨宿りに使った松に「太夫」の爵位を授けたので、松の異名を太夫とした。一般的に「太夫」とは遊女の最高位のことである。男の能楽師が「五位」の通称であったので、猿楽を演じる遊女がそれに倣って称したことが始まりだという。しかし逆に太夫を「松の位」とも言う説もある。

日本で松を語るとき、クロマツが海岸沿いに分布することから、クロマツがマツの代名詞とされてきた。これは白砂青松が日本の美しい海辺の風景を表す言葉として定着しているからであろう。自生地以外の内陸部でも里程の松としてその存在は貴重である。

クロマツが群馬県の木に選定されたのは、NHKが放送開始30周年を記念とした昭和29年「郷土の花選定委員会」が発端である。

本来自生しないクロマツが群馬県の木となった理由は、次のような経緯である。当時赤城山麓では、クロマツが戦後大規模に植林されていて、土壘に生育する県庁の黒松と合

わせ、「県の木」とするため関係者の方策だった。この選定はハガキによる公募で行われ、ク

ロマツを推進する業者は黒松と印刷したハガキを大量にばらまいた結果、クロマツが「群馬県の木」として選定された。当時は今ほど「やらせ」に対する批判など全くなかったからであり、学者の意見も一蹴された結果だった。

松は建築材としても有用であり、土台、梁、桁などに利用されてきた。しかし近年、ツーバイフォー工法により使用は激減している。燃料にしても燃料革命で今は顧みられない。

ただ焼物の世界では、窯の燃料として珍重されるのは、他の木材と比較して単位重量当たりの燃焼熱量が高いためである。

黒松が城郭にあるのは景観のためばかりではない。籠城時に食料として樹皮（内皮）を利用するためであり、また松根油は燈火や生薬としての利用価値からである。

戦中、世界を敵にまわし石油の輸出を止められた軍は、飛行機が飛ばせないといって松根油供出のため伐根させた。古来、あかし（松明）、ひで（肥松）としては利用してきた産物だが、飛行機を飛ばすとすると松一本で（樹齢数十年生）18秒しか飛ばせない。全く効率

の松が失われた。

「マツの実」は食用として朝鮮五葉松などから採取される。60%を超える脂質のほか微量元素も含まれ、独特の香りを持ち健康食品や菓子などに利用され輸入している。因みにクロマツ、アカマツの実は食用にならない。

マツの方言は日本植物方言集成(2001)に8採録されている。あおば||富山(砺波)。とぼり||福島(南会津)。まつぎ||広島(比婆)。きつつき||長野(佐久)。きつつこ||京都。まつこのぼん||滋賀(湖西)。めんまつ||香川。やつぶさ||大阪。と以外に少ない。

クロマツ 19。いそまつ||広島(安佐)。おまつ||福井(大野)。おとごまつ||青森、岩手。おにこ||岐阜(東濃)。おにまつ||新潟(佐渡)、岐阜(東南部)。おんき||広島(芦品)。ぎんまつ||山形(北村山)。ぎんみどり||山形(北村山)。しらほいまつ||千葉、静岡。しろばい||山梨。しろほい||静岡(駿河)。しろほいまつ||千葉、静岡。しろまつ||岩手(気仙)、宮城、群馬。しろみどり||新潟(佐渡)。||のとまつ(秋田、山形、酒田(飽海))。のどまつ||秋田。はまます||宮城。はまます||岩手、宮城。めじろ||新潟、長野(佐久)。アカマツ 19。あかほまつ||山梨。あがます||

は基より再生産性に欠ける悲しい行為で多く

宮城、秋田。あがまつ||秋田。あかめまつ||

長野。おなごまつ||青森、秋田、兵庫、島根、岡山、広島(備後)、福岡、熊本(玉名)、鹿児島。おんなまつ||青森、茨城(久慈)、群馬、千葉、神奈川(津久井)、静岡。じまつ||静岡(駿河)。どよまつ||岩手(和賀)。な

いちまつ||北海道。によーばまつ||島根(出雲・隠岐島)。によーばまつ||広島(比婆)。のらまつ||秋田(仙北)。ひめまつ||岐阜(恵那・岩村)。ふたばまつ||岩手、秋田、山形、埼玉。まじ||岩手(上閉伊)。めまつ||岩手、秋田、山形(飽海)、茨城、新潟、静岡、京都、和歌山(海草)、島根、高知、大分、鹿児島。めんき||広島(芦品)。めんまつ||富山、愛知、兵庫、奈良(南大和)、和歌山、鳥取、島根(石見)、岡山、山口(厚狭)、香川、愛媛、高知、鹿児島。やにかきまつ||岩手(和賀)。

チヨウセンゴヨウ 13。おにこ||山梨(南巨摩)。おにごよー||山梨(南巨摩)、長野(八ヶ岳)。ごよーのまつ||岩手。ごよーまつ||青森、岩手、岐阜。こんごーさんまつ||静岡。しやくま||新潟(苗場山)。ちよーせんごよー||青森、岩手。ちよーせんまつ||静岡、高知。はながごよー||山梨。はながらごよー||山梨

(南巨摩)。はなしごよー山梨(南巨摩)。ほんごよー埼玉(秩父)、岐阜(飛騨)。やにたりのき長野。

ハイマツ12。ごよーまつ秋田。しもふりまつ青森(下北、上北)、岩手、秋田。そなれまつ筑紫。たけまつ長野(上閉伊)、だけまつ羽州。ちようかいまつ山形(飽海)。つるまつ長野(駒ヶ岳)。なえのまつ長野(戸隠山、下水内)。なげのまつ長野(上水内)。ぶさ新潟(魚沼)。へーずりまつ長野(飯田市)。べぼ愛知(知多)。

以上が松の方言の総べてである。

花言葉 同情、不老長寿、勇敢

誕生日 1月19日、12月12日、12月14日

と文献によって諸説ある。

## 図鑑の内と外

# 植物私記 ③2

佐鳥 英雄

## ノハナショウブ

「あいにく〇〇と重なっており、参加できません」

会合などで、こういう返書が紹介されるこ

とがよくあります。なんとなく社交辞令のようには響くのですが、本当の場合も意外に多いのではないのでしょうか。たとえば、へ桐生タイムスという欄があつて、ステージ・イベント・スポーツ・展覧会などと、項目別になつてい

込むのですが、おせっかいが、またむくむくと目覚めてしまうことがよくあつて、難儀しています。先日も、そういうことがあつて、A新聞に投書しました。お決まりの無視冷笑でした。私の場合は、一理どころか二理三理あるので、余計無視されてしまうようです。

先日も、桐生市では森永卓郎氏の講演会がありました。ちよつと拝聴したかったのですが、結局、不参加。へ桐生タイムス(11・10・12)によりますと、氏は話の冒頭で、「私は大震災後、首都機能を福島へ移すように主張しているのだが全く無視されている。誤つていれば激しく攻撃されるのに、無視されているのは、一理あるからなんです。」とまず自分を主張され、参加者の共感と笑いを誘つていた由。

先日の内容を申しましょう。私は、各地で各時おこなわれる集会やデモの参加者数というものはずつと疑問を持つて来ました。いまも持っています。で、今回はたまたま予定された11・9・19の、東京明治公園の、「さようなら原発集会」なるものに注目してしました。翌日のA新聞、「主催者側によると、全国から約6万人が参加した」ところが、11・9・25の記事になりますと、「この日は主催者発表で6万人、警視庁調べで約3万人が集まった」となります。(因みにこの集会の呼びかけ人は大江健三郎・落合恵子・内藤克人・澤地久枝さんら)そして、「世界」11月号になれば、「さようなら原発6万人集会の記録」となります。

そうなんです。よい提案はしばしば無視や冷笑という評価が待っています。バカバカしいからもうやるまいと、私なども心に教え

私が問題視するのは、この、いつもいつもの主催者発表の人数と警視庁発表の人数の甚だしいずれかたです。

賢者Aは言うでしょう。「バカだねえ、おまえは。人集めに汗をかく人々は多めに見る、言う。面白くねえ」と思っている人々は少なめに見る、言う。人情というものさ」

賢者Bは言うでしょう。「あなたの好きな国語辞典だって、いくつか並べて読めば、説明の仕方ではなく、説明そのものが違ってることなどよくあるでしょう。世の中のこと、それくらいの誤差は日常茶飯。自然界だって、偶然、錯覚、誤解だらけじゃないですか」  
賢者Cは言うでしょう。

「だから、足して2で割ればいいのです。  
(6+3)÷2=4.5万人」

Aは人情と事実を混ぜこぜにしています。  
Bはまあそういうことはありますけど……  
CはBと同じく。(つまりいつも成り立つわけではない)

と、私は思います。

つまり、私が問題視するのは、ふだんから正義をふりかざしている新聞社が、公平をよそおって、両者の言い分を載せるだけで、真実を把まなければ……という努力を放棄して恬然としている、そのような態度なのです。私はそのことを投書という形で訴えようとした。いわゆる、

ただ、両方の数字を垂れ流すのは無責任  
社として独自に集計せよ。

方法①光を当てて、一瞬にして人数を知る  
技術の開発

方法②不可能ならば、集会所の面積と人  
込みの様子からの計算方式の確立  
以上の私の提案は無視された……ということ  
はすでに記しました。(念のため記しますと、  
私はA新聞に磊塊などありません)

つまり、私が最後に問題視するのは、こういう一つの事実、しかもそれは多面体でもな  
んでもなく、ただ単純な、そこに人が何人集  
まったかという事実に対して、評価ではなく  
集計が違った場合、それを解明しようとしな  
いでやりすごしたり、冷笑したりしているそ  
の精神です。いうならば乃公意識とでもいう  
のでしょうか。今度の原発事故で、私たちはこ  
ういうものが企業や社会の仕組みの奥にどっ  
かりと居据わっていることも思い知らされた  
のだと思います。日本の民主主義はまだ12歳  
くらいだと考えておくほうがよさそうです。  
たとえば、TVのCM。たまに民放の番組を見  
ると、気分が悪くなるか、頭が壊れそうになる  
ほど厚かましくしつこい。私の頭はもう年  
齢相応なのですが、子供のことが心配です。

私は私で、そういう壊れそうな頭を少しで  
も冷やすために、自然観察に励むのです。で  
すから私は、連日、いわば放射能のようにCM  
を浴びて、それに対応しないで見ている人々はだ  
んだん信用しないようになっていきます。ちょ  
うど、この第二次世界大戦を経て、再軍備  
を主張する人々を私が信用しないように。

『桐生市植物誌』を須藤(志成幸)さん、津  
久井(芳雄)さん、私の三人で上梓したのは  
1981年でした。もう30年も前のことだ  
が、この間に桐生市域から全く姿を消したも  
のがいくつもあります。ハバヤマボクチとか  
ノハナシヨウブとか。ハバヤマボクチなどは、  
オオヤマボクチがなんとか生き延びているの  
に、スウィーツと消えた……という感じで、不  
思議です。消えそうなものもあります。ジロボ  
ウエンゴサク・ヤマエンゴサク・ハッカなど。  
今年の正月、私はセリ・ナズナなど、近くの太  
田市藪塚町の田で探し回りました。セリはつ  
いに指に当てることなく帰宅しました。ハッ  
カなどはもう消えたのかもしれない。ハハ  
コグサが少なくなりました。ここ半年ほど注  
意していますが、全く見ていません。『桐生  
市植物誌』を作る時、チチコグサをやっと捉  
えて記載したのですが、いまはやたらとあり

ます。草は爆発的に増えたり減ったりしますので、どこかで生き延びているかもしれないのですが。

3年ほど前、太田市の西長岡にあるピオープでは私はノハナシヨウブの花に出会いました。一株で、花は三つほどでした。(正式名上州太田ピオトープの里) 気づいた時、私は奇異な感情を持ちました。誰かがそつと植えてくれたのか、カミサマのプレゼントか…。ところが翌年、そこは排水溝を作るためいじられて、ノハナシヨウブは消滅。ところがどっこい、その近くに四ヶ所、数も株も増えて咲いたのです。不思議は増すばかりでしたが、嬉しい不思議なので、私は勝手ながら、手作りの看板を立てました。「この草 貴重種です 刈らないで下さい」

看板には多少の効果があるようで、刈られたり刈り残されたりでした。いつか刈っている人と出会ったので少し話したのですが、草刈りは地区に任されていること、年、できれば4回刈りたいが、予算から2回しかできないこと…。問題はその刈りかたで、ガマはもちろん、カキツバタもミクリもお構いなしに切りとびします。それを見る度、私は、「長谷井さんが嘆くだろう」と思います。事情も

経過もよく知らないのですが、ここは、たぶん、菅塩などと並んで、長谷井(稔)さんたちが市に提案して作ったものでしょう。それが訪れる人はほとんどなく、ただ厄介な金食い虫となっている…に近い。新しい看板が立っています。〈環境省 希少野生動植物種保存推進委員 長谷井稔 監修〉

〈彼が生きていれば…〉と私。〈この草刈り方法とか、菅塩の、平地では珍しいオオニガナの保存とか…話し合えたのに…〉一昨年だったか、ガンで亡くなりました。

「体調もよくなりそうなので、近く相談しようと思っっています」私にとっては、彼の最後のことがいまも耳にあります。オオニガナの保存のことを私が持ちかけていた頃のことでした。付近に播いたり、近くの別の池に持って行ったりしているのですが、まだ成果は出ていません。できれば、桐生市の少し山がかった路傍とか、濡れた山中とかに復活させてみたいと思っっています。桐生市自然観察の森のレンジャーの一人長谷見(哲夫)さんは、造園業で働く庭師です。彼はこのピオトープの経過など多少とも知っているようで、ノハナシヨウブはピオトープを造成した時入れたものだろう…と言います。私の誰かが内緒で入

れた説とか天孫降臨説とかより合理的です。どこかに零れていた種子がいつか復活したのでしょうか。

私はノハナシヨウブが桐生市から消えたのを惜しんで、その復活をずっと考えており、たとえば、B新聞の09・7・19の、青森県八戸市に沢山ある…という記事など大事にとつてあるのですが、そこまでしなくても、なんとかなりそうだと、今年(2011年)の秋、ノハナシヨウブの種子を採りながら思っていました。

## 群馬の地質

### 湯檜曾の地質

飯島 静男

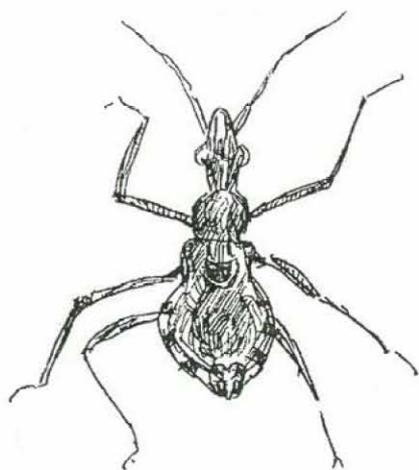
前回は岩石の話ではなく、犬や猿のことで済みません。それで何がわかったか？

湯檜曾温泉付近には新生代新第三紀の地層が分布します。この新第三紀層は湯檜曾川沿いの低い所だけにあつて、右岸左岸ともに、川の流路に平行な断層で切られ、その外側には花崗岩が分布します。この花崗岩は谷川連峰主部の花崗岩体よりは古く、新第三紀層の基盤です。新第三紀層は堆積後に、基盤岩中

に生じた、幅数百m、長さ3kmほどの割れ目に落ち込んだのです。

詳しく言うと、左岸側(東側)の落ち込みは断層一枚ではなく、数枚の断層が50〜100mくらいずつ順にずれて、結果的に階段状の落ち込みかたをしています。こちら側を登ると、崖状の急斜面と緩斜面が繰り返されて、基盤の花崗岩と新第三紀層の砂岩や泥岩などが交互に出現します。

右の岩石の間をぬって(?)、流紋岩が貫入していて、地質図は複雑になります。土合(赤沢間の国道沿い)には、著しく珪化して、白色緻密な岩石が露出していますが、一部の本物の流紋岩を除いて、あらかたは凝灰質の泥岩です。モルタル吹き付けのため、だいぶ隠れました。



残された自然の中で (155)

## 観音山鳥日誌④

谷畑 藤男

9月

2日、「花の丘」及び「長坂牧場」付近の電線でムクドリに混じったコムクドリ200羽の群れを見る。夏鳥であるコムクドリは間もなく南方へ去る。観音山に多いミズキの実が黒紫色に熟してきた。4日、「のぞみの園」駐車場付近にあるミズキ樹上にカラス50羽が集まり実をついばんでいる。ハシボソとハシブトの混群である。キャンプ場を含む観音山一帯はハシブトガラスの世界であるが、「のぞみの園」「花の丘」など開けた微地形にはハシボソも分布する。

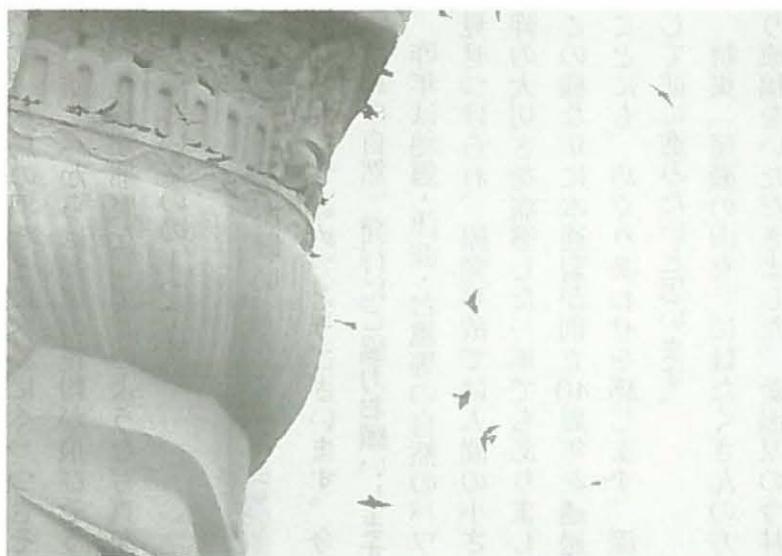
14日10時、ハチクマ雄が管理棟の上空を旋回。16日9時、ツミ2羽が飛ぶ。観音山丘陵で繁殖したハチクマ・サシバも南方へ渡り去る。

10月

13日曇天10時、白衣観音頭部にイワツバメ200羽が乱舞。観音様の頭頂部やヘアバンドの凹みに休息する個体もいる。石像とツバメの組み合わせは、オスカー・ワイルドの童話「幸

福の王子」を連想させる。かつて八木沢ダム  
の巨大壁面で休息するイワツバメの群れを見たことがある。(1998・10・10)イワツバメは渡りの途中悪天候に遭遇すると人工物で一夜の時をとるらしい。

15日管理棟前のヒノキ林を30羽のカラ類混群が移動する。メジロ・シジュウカラ・ヤマガラ・エナガ4種。9月26日にはメジロの群れにキビタキ雄が混じっていた。



観音様の頭部に舞うイワツバメ (2011.10.13)

29日、風無く晴天。ジョウビタキを初認。

管理棟にカメモシ飛来。30日曇天、「花の丘」のコスモス残花。「みやま養護学校」前電線にニユウナイスズメ40羽渡来する。31日、林道終点付近の畑にカシラダカの群れ。ミヤマホオジロ雌1羽とアオジ2羽が混じる。秋は渡りの季節。「銀河鉄道の夜（宮沢賢治）」では、信号手が秋の夜空に向かい「いまこそわたれ わたり鳥」と叫ぶ。

## 11月

13日風の無い晴天。虫日和。カメモシ・テントウムシが多数管理棟に越冬のため飛来。陽だまりの窓枠やベニヤ板に虫塊をつくっている。回収した巣箱のひとつにはヨコヅナサシガメの終齢幼虫50匹が身を寄せ合っていた。

21日、荒久沢の谷をシメの小群れが飛翔。青空の中にヒメアマツバメの群飛。22日、ツグミ初認「花の丘」。今年は冬鳥が少ない気がする。

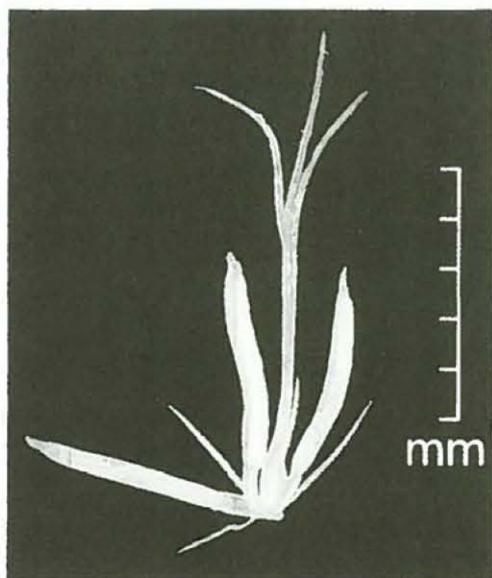
11月下旬、林の木々は色づきケヤキやサクラはすでに落葉。コナラの葉がひらひらと谷間を舞い、落ち葉の帯が林道を縁取っている。キャンプ場広場斜面を冬桜のみが薄紅色の小さな花で枝先を飾る。山はこれから本格的な冬を迎える。

## 植物をミクロで見ると (4)

### ウキヤガラ

青木 雅夫

今回は熟していない旬の花を見てみましょう。2008年5月6日の写真です。水辺にヨシやマコモなどと一緒に大きな群落を作るウキヤガラです。小穂の縁から見える雌しべの様子を詳しく見ると、雄しべが3本、雌しべが1本で柱頭が3岐です。花びらに当たる刺針状花被片が6本ありますが、下向きにざらつくのも観察のポイントです。刺針状花被片は瘦果が熟しても脱落しないで、他のものにくっついて種子の散布に役立っているよう



です。水鳥の羽などに容易にくっつきそうです。雄しべからは多量の花粉が飛びそうですね。花粉が邪魔をしてこのような写真を撮るのが難しいものの一つです。

### 編集からのお願い

明けましておめでとうございます。今年も「群馬の自然」発行にご協力お願いします。

昨年は地震・津波・台風等の自然のパワーを見せつけられ、原発事故では人間の小ささや絆の大切さを痛感した一年でもありました。この様な年に本連盟が創立40周年を通過したことにも、めぐりあわせを感じます。深呼吸して前に進みたいと思います。

特集「尾瀬の山々」にはたくさんの方々より原稿をいただきました。新潟県の今井先生からも新潟県の尾瀬学習について紹介していただきました。お世話になりました。

次号特集は「群馬の天然記念物」を予定しています。原稿のメ切りは2月29日です。自然保護に関するご意見や観察記録も合わせてお待ちしております。事務局宛てにお送り下さい。

夏号では「ぐんま百名山の自然(X)」下仁田付近の山を予定しています。よろしくお願ひします。

# 赤城山のツキノワグマ

関 敏雄



赤城山鈴ヶ岳北面でツキノワグマ4個体を撮影しました。冬籠り前の行動も観察できました。Cは撮影直後、穴に入りました。

平成23年12月4日 2頭(A・B)  
12月11日 2頭(C・D)

# 事務局日誌 (163)

- 9月20日 会報「群馬の自然・秋」原稿編集長渡し
- 9月24日 「創立40周年記念講演会」(唐沢孝一氏)
- 9月25日 前橋市主催「赤城山小沼周辺自然観察会」指導
- 9月28日 谷川岳エコツアーリズム推進協議会臨時総会
- 10月1日 「シニアと児童の赤城体験」指導
- 10月2日 ぐんま環境森林フェスティバル(群馬産業技術センター)  
「西御荷鉢山」自然観察会 22名参加
- 10月3日 赤城山環境ボランティアガイド会議
- 10月5日 会報「群馬の自然・秋」校正原稿印刷所渡し
- 10月11日 第2回「赤城山覚満淵のササ刈り作戦」準備会
- 10月14日 県二ホンザル適正管理計画(第Ⅲ期)策定検討会
- 10月19日 会報「群馬の自然・162秋」郵送
- 10月20日 上州三峰山自然観察会 下見
- 10月22日 「赤城山ボランティア環境ガイドPartⅡ」座学
- 10月25日 10月 理事会 14名出席
- 10月30日 「上州三峰山」自然観察会 32名参加
- 11月1日 県自然環境課「自然環境保全地域」係長来所打合せ
- 11月6日 第2回「赤城山覚満淵のササ刈り作戦」76名参加
- 11月11日 県森林病虫害等防除連絡協議会
- 11月15日 東電(株)西上武幹線(箕郷西毛区間)報告書持参
- 11月25日 赤城山環境ボランティアガイド反省会
- 11月26日 11月理事会 11名出席
- 12月2日 23年度連盟表彰者祝賀会(前橋)
- 12月8日 県自然環境課来所打合せ
- 12月9日 秩父太平洋セメント(株)年末挨拶来所
- 12月15日 会報「群馬の自然・163冬」原稿メ切

## 事務局だより

・第2回覚満淵ササ刈り作戦(76名参加は11月6日、赤城山の自然保護連盟推進協議会(小暮市郎代表)主催で開催されました。連盟は

理事長以下会員16名が率先参加し、小雨模様の中ミヤコザサ、ススキ等の刈払い及び搬出作業に汗を流しました。来春のゼンテイカ、レンゲツツジの開花が楽しみです。次回「ササ刈り作戦」は5月20日(日)の予定です。会員の皆様のご参加を切望いたします。

・11月7日県庁正庁の間に於いて、平成23年度自然保護の分野で「県環境賞」を関敏雄氏

(理事)が受賞されました。永年にわたる猛禽類、哺乳動物等調査研究の賜物と敬意を表します。おめでとうございます。

### 新会員紹介(敬称略)

今井 廣(前橋)

### 寄贈品(図書等)

吉田 龍司様 ・赤城学  
岸 好孝様 ・傷だらけの百名山  
・自然の終焉  
・昆虫おもしろブック  
・自然保護という思想

## 群馬の自然 163号

発行日 平成24年1月  
 発行人 NPO群馬県自然保護連盟  
 編集人 谷畑藤男  
 発行所 群馬県自然保護連盟事務所  
 〒370-0046  
 高崎市江木町610-10  
 電話 027-324-5706  
 携帯 090-4833-5789  
 振替 00320-6-13239  
 会費 2,000円(年間)

下田 徹様 ・山・すばらしい自然  
 三井田 進様 ・展示用ガーゼル 一基